

# 大学生が持つ子ども・子育てのイメージ形成に与える影響

## —保育学習や友人関係による検討—

Study of Affects to University Students' Image about Children and Child Caring

高 峰 彩 華\*  
Ayaka TAKAMINE

吉 川 はる奈\*\*  
Haruna YOSHIKAWA

【キーワード】子育て、子ども、保育学習、友人関係、大学生

### 1. 問題

近年、少子高齢化や核家族化、都市化などにより、青年が子どもと関わる機会が減少している。大家族で子どもの人数が多い時代には、幼少期から周囲に子どもがいるのが当たり前で、子守りなど小さい子どもの面倒を見るのが日常的に行われていた。すなわち子どもの時から乳幼児に関する知識や技能を自然と獲得した後に、親として子育てをする時代であった。しかし核家族化、少子化の中で、乳幼児の世話をしたことがない者が親になるということも珍しいことではなくなった（澤田ら2013）。

これらの社会変容の中で、家庭内や地域内で子育てを支え合う環境が崩れ、児童虐待や育児不安など、様々な問題も深刻化している。児童虐待について、平成23年度の児童相談所の児童虐待の相談対応件数は59919件（厚生労働省、平成23年度）であり、年々増加傾向にある。さらに虐待者の内訳は実母が59.2%、実父が27.2%であり、実母が自分の子どもに対して虐待をしてしまう割合が最も高いという深刻な事態である。

虐待が起こる要因としては育児不安やストレス、核家族化や地域からの孤立により相談できる人がいないなどが指摘されている。その育児不安については、牧野（1982）が育児不安を「子どもの現状や将来、或いは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態また無力感や疲労感、或いは育児意欲の低下などの生理現象を伴ってある期間持続している情緒の状態、或いは態度を意味する」と最初に定義して以来、様々な研究がなされている。

育児不安に影響を及ぼす要因として、子どもの行動へのストレス、育児観、育児ソーシャルサポート、セルフエフィ

カシーが挙げられ、その中でも特に、育児ストレスーによる影響が大きいとされている。このことは「育児ストレスを過程としてとらえ、母親を煩わせる子どもの行動や態度を育児ストレスー、それによって引き起こされる母親のストレス反応を育児不安とする」と定義した手島ら（2003）の知見と一致するものであり、子どもの行動にどう対処してよいかわからないという戸惑いが母親としての不安や適性のなさでの自信喪失へとつながるのではないかと（渡辺ら、2005）との指摘もある。

加えて地域間のコミュニティの希薄化など、青年は子どもや子育ての様子を見聞きする機会が少なくなっていると考えられ、もはや乳幼児の世話をしたことがない者が親になることが当たり前という状況になるのではと危惧される。このような社会環境の中で、将来、父親・母親になり、子どもを育てる可能性のある青年は、現在、子どもや子育てをどのように捉えているのであろうか。

大学生における子どものイメージについては、子どもとの接触体験が少ないほど子どもの行動特性からくるイメージは否定的である（野村ら、2007）と指摘されている。家庭科の保育学習において、対児感情の良好な群は、過去に子どもとの接触経験が多く、子どもと触れあった体験も多いこと、また看護学においても、母性看護実習を経験することにより、児に対する回避感情は低下する（土居ら1993）することがいわれている。これらのように、子どもへのイメージは、子どもとの接触体験と関連させて論じる研究が多い。

一方で、大学生がもつ子育てのイメージについては、多くの学生は、育児は「楽しい」や「子どもの成長がみられ

\* さいたま市立慈恩寺中学校

\*\* 教育学部家政教育講座

る」というプラスイメージを持っている反面、「育児は大変」や「育児ノイローゼになる」というマイナスイメージも持っており、育児にアンビバレントなイメージを持っている（石松ら、2004）という。

学生にとって、子育てはまだ、体験したことのない行為であり、情報から得たイメージばかりが先行し、プラスイメージとマイナスイメージとをバランスよくもっているということではないと予想される。

子育てのイメージに関する研究では、父親・母親の表情や子どもとのふれあい場面、子どもの笑顔を直接見ることは子育ての否定的な感情を減少させる（今村ら、2011）などといった報告がなされている。これらのように、子育てのイメージに関する調査についても、子どもと実際に触れ合うことのできる交流体験や子育て経験者から子育ての体験談を聞くなど、体験的な活動をするのが関係しているという報告が多い。以上のように、子どもや子育てのイメージ形成には子どもとの実際の関わりが重要とされているが、体験は受け入れ側の状況等にも大きく左右されることが予想され、どのくらい体験をしたか、しないかということだけでなく、どのような体験をしたか、またそれを補う学習がどのようになされたのか、体験の内容を明らかにする必要がある。

## 2. 目的

本研究では、子どもと子育てのイメージ形成に関わる要因を明らかにすることを目的とする。子どもや子育てのイメージに関する研究の対象となるのは、子どもについて学ぶ機会が多いと考えられる保育学科や看護学科の学生が多いが、関心も高く経験の上でも他の学科よりも子どもとのかかわりが多いと思われる。そこで今回は対象をこれらの学科に特定せずに行うこととする。

将来、子育てを担う可能性のある大学生を対象に、子どもや子育てのイメージには子どもと関わるのが大切であるとされるが、関連があるのか、あるとしたらどのような内容が関連するのかを検討する。また子育てをする際のたがいに支え合う環境づくりへの示唆を得るために、子どもに対するイメージと友人関係に関連がみられるかどうかとも検討する。

## 3. 方法

総合大学の学生463名に調査の趣旨、目的等を説明し、同

意をえられた者に質問紙を配布し、協力を得た。

質問紙は自記入式で、個人が特定されないよう配慮して回収にあたった。また質問内容は予備調査のインタビュー結果と先行研究をもとに質問項目を作成した。具体的には、基本的属性、子ども時代の遊び相手、保育体験の状況、現在の友人関係、家庭科保育学習の内容、対児感情尺度（花沢）、自由記述等を含む全77項目からなる。

その結果得られた回答のうち有効回答数は405、有効回答率87.5%だった。

調査期間は2012年7月中旬から2013年10月に実施し、分析はSPSSを用いて統計処理を行った

## 4. 結果

### （1）対象者の属性

有効回答を示した405名の結果を分析した。

対象者の学年と性別、家族形態を以下の図に示した。

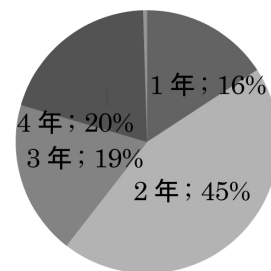


図1 対象者の学年

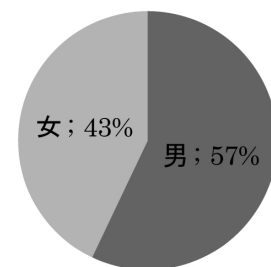


図2 対象者の性別

図1より、対象者は1年生から4年生まですべての学年を含み、2年生が45%、4年生が20%だった。また図2より男性が57%、女性が43%であった。

また現在一人暮らしをしているのは50%を占めていたが、図3にみるように、入学前の家族形態は、核家族が75%と最も多くを占めていた。

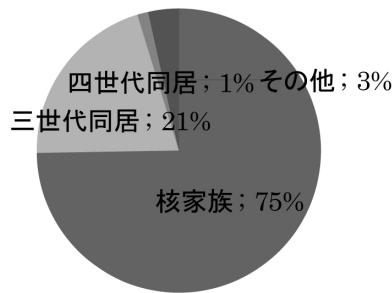


図3 対象者の入学前の家族形態

## (2) 子どもと関わる機会の状況

### 1) 乳幼児と関わる機会

現在の日常生活の中で、乳幼児と関わる機会があるかどうかを尋ねたところ、「ある」と答えたのは29%と少なく、71%の学生が「ない」という状況だった。

### 2) 小学生と関わる機会

同様に、現在の日常生活の中で小学生と関わる機会をたずねたところ、「ある」と答えたのは41%となり、乳幼児と関わる機会に比較すると多いものの、全体の半分以上にとどまった。

### 3) どのような場面で子どもに関わるのか

「子どもとかかわるのはどのような場面か」に対しては、ボランティアや子ども会サークル等で定期的に関わる場面があるとの回答したのは、乳幼児と関わる場合で3%、小学生と関わる場合で14%と非常に少なかった。いずれも飲食店やスーパー等のアルバイト先で関わるのが半数を占めており、定期的に特定の子どもとの人間関係を経験していることは期待できない結果となった。

## (3) 家庭科での保育学習の状況

### 1) 保育分野の内容への興味

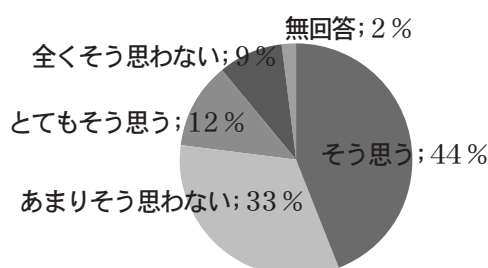


図4 保育分野に対する関心の有無

保育分野の内容への興味の有無を尋ねたところ、「とても関心がある」は12%、「関心がある」は44%となり、あわせると半数を占め、概ね関心をもっていた。しかしその学

習内容について、高校家庭科の教科書を参考に、保育分野を10項目に分け、覚えている題材をたずねたところ、項目数3個、項目数5個覚えているという人が多く、6個以上覚えている人数は急激に少なかった。さらに10項目すべて覚えているのは9%とわずかで、全体として覚えている項目は少ないことが示唆された。

### 2) 保育学習で子どもと関わる楽しさ

「授業や職業体験で子どもと関わる機会があった」と回答した者に「その活動は楽しかったですか？」と質問したところ、「とてもそう思う」が85名、「そう思う」が62名、「あまりそう思わない」が10名、「全くそう思わない」が3名であった。子どもと関わる活動の楽しさの状況を図5に示す。「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が76%と非常に高く、実際に子どもを見たり関わったりした学生の多くは、その活動を楽しんでいるという結果となった。

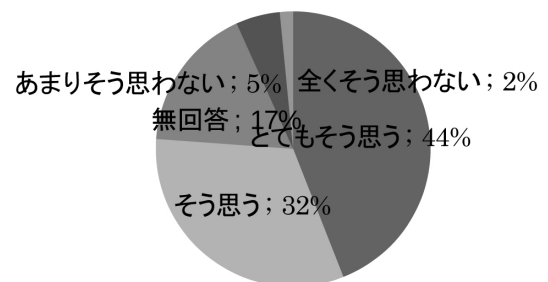


図5 保育学習で子どもと関わる活動の楽しさ

## (4) 大学生が抱く子どもイメージの特徴

### 1) 子どもへの好意

対象者に「子どもは好きですか？」と質問したところ、「好き」「どちらかといえば好き」を合わせると79%の回答があり、子どもを好きだという人が多い結果となった。

### 2) 子どもに対する感情

子どもに対する感情について、本研究では花沢の対児感情尺度を用いて検討した。接近感情を「あたたかい」「うれしい」などを含む14項目の肯定的側面から、また回避感情を「たいへんな」「おそろしい」などを含む14項目の否定的側面から測定した。

大学生が抱く子どもに対する感情をたずねたところ上位項目のうち、12項目は接近感情を占め、対象者は概ね子どもへのイメージは「肯定的である」となった(表1)。

表1 子どもに対する感情

	あてはまる	あてはまらない	わからない
ほほえましい	390	11	4
かわいらしい	382	14	9
あかるい	378	17	10
わがままな	372	26	7
たのしい	359	36	10
たいせつな	353	40	12
やわらかい	344	41	20
おもしろい	331	63	11
しあわせな	330	52	23
たいへんな	323	61	21
あたたかい	299	70	36
うれしい	270	96	39
すてきな	246	124	35
すばらしい	221	141	43
めんどくさい	162	225	18
うっとしい	142	237	26
きれいな	141	225	39
うつくしい	134	234	37
じれったい	134	236	35
おそろしい	88	284	33
こわい	70	295	40
きたない	69	303	33
じゃまな	56	313	36
にくらしい	54	314	37
うらめしい	39	311	55
きらいな	30	332	43
かなしい	24	337	44
きびしい	22	349	34

\* 網掛けは接近感情項目、それ以外は回避感情項目

#### (5) 子どもとの関わりで印象に残る場面

子どもと関わる中で1番印象に残っている場面を自由記述でたずねた。310の自由記述回答が得られ、えられたその内容をKJ法で分類したところ、次の6グループ「子どもから学生への働きかけ」「子どもの様子」「子どもと一緒に遊んだこと」「子どものイメージ」「学生から子どもへの働きかけ」「その他」に分けられた。

「子どもと一緒に遊んだこと」と「子どもから学生への働きかけ」が多く、子どもと時間を共有し、子どもからの何らかの働きかけが印象深いとする人が多かった。一方で、学生から子どもへの働きかけは4%と少なく、学生自身が子ども

に関わることにに対して印象に残りにくいことがうかがわれた。したがって学生に対して、子どもから働きかけられるような機会を意図的につくっていくことの必要性が示唆された。

#### (6) 対児感情における検討

##### 1) 接近感情得点と回避感情得点の結果

対児感情（接近感情得点、回避感情得点）については以下の結果となった。

接近感情14項目、回避感情14項目について、5件法で回答を求めた。「とても当てはまる」を4点、「当てはまる」を3点、「当てはまらない」を1点、「全く当てはまらない」を0点、「わからない」を2点として、それぞれの合計得点を算出した。

接近感情得点の平均点は39.38点、回避感情得点の平均点は20.05点だった。平均点をもとに高群、中群、低群に分類し、他の様々な質問項目との間に関連が認められるかどうか比較した。

表2 接近感情得点と回避感情得点の分類

	低 群	中 群	高 群
接近感情得点	～30	31～48	49～
回避感情得点	～11	12～28	29～

性別による比較では女性は接近感情得点において高群が多く1%水準で有意差が認められた。女性の方が子どもを肯定的に捉える人が有意に多かった。

##### 2) 過去の遊び相手による比較

「父と遊んでいたか」と接近感情得点群の関連において、5%水準で有意であった。子どもの頃、父と遊んでいた人は低群が少なく遊んでいなかった人は低群が多かった。

「母と遊んでいたか」と接近感情得点群の関連において、1%水準で有意となった。子ども頃、母と遊んでいた人は低群が少なく高群が多い。遊んでいなかった人は低群が多く高群が少なかった。

「祖父と遊んでいたか」と接近感情得点群の関連において、5%水準で有意だった。子どもの頃、祖父と遊んでいた人は接近感情得点が高く、遊んでいなかった人は接近感情得点が高い人が多かった。

父・母・祖父と遊んでいた人は子どもへの接近感情得点の低群が少なかった。身近な存在である保護者との遊びは有意義なものだと考えられる。子どもの頃楽しかった保護者との遊びは、想起することで子どもが喜ぶ方法や関わり方が分かり、同じように子どもと接することにつながる事が推察される。



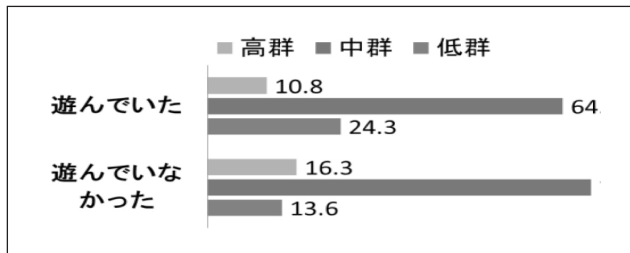


図6 近所年下の子と遊んだ経験と回避感情得点の関係

また図6 に示すように、「近所の年下の子」と遊んだ経験と回避感情得点との間で、5%水準で有意であった。近所の年下の子と遊んだ対象者は、回避感情の低群が多かった。

年下の子と遊ぶことによって、年上の自覚をもち、年上としてふるまう経験をしたことが考えられる。年下の子どもの特性を把握し、自分が年上として受容することによって否定的感情が軽減することにつながることを推察された。

### 3) 保育体験の楽しさによる比較

保育体験で「子どもと関わるのが楽しかったか」どうかと接近感情得点との関連性、さらに回避感情得点との関連性はともに1%水準で有意であった。「楽しかった」人は子どもへの接近感情の低群が少なく、回避感情の高群が少ないことが明らかになった。

保育体験で子どもと楽しいと思える何らかの関わり合いができ、子どもと有意義な時間を過ごせたこと、子どもの無邪気さ、かわいさなどに触れたことで、子どもに対して良好なイメージを形成したのではないかと推察された。

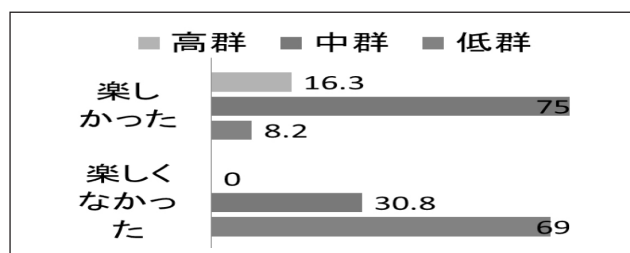


図7 保育体験の楽しさと接近感情得点の関係

### (7) 友人関係形成と子どもイメージとの関連性

「友人と思える人がいますか？」の質問に、「いる」と答えた人は95%、「いない」と答えた人は2%だった。

接近感情得点と友人の有無による関連性において5%水準で有意であった。友人がいる人は回避感情の低群が多く、高群が少ないこと、わからない人は高群が多かった。友人関係形成において積極的な対象者は、子どもに対する否定的なイメージは少ないことが明らかになった。

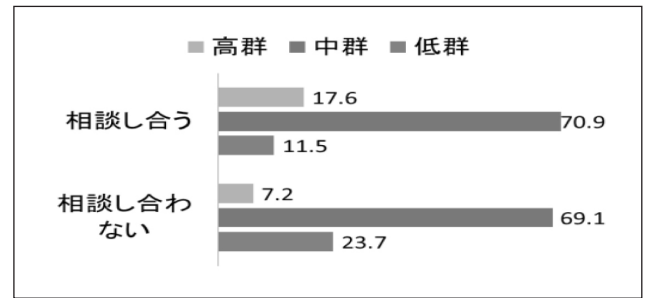


図8 友人関係のとらえ方と接近感情得点との関係

友人関係の捉え方で比較したところ、接近感情得点では「相談し合う」、「互いに心を許すことができる」、「互いに理解している」、「互いに高め合う」、「気持ちを通じ合う」、「互いに関心をもっている」、「励まし合うことができる」を含めた計7項目で有意差が認められた。

「楽しい」は有意差が認められなかった。たとえば「相談し合う」においては、高群が多く、低群が少なかった。回避感情得点は「励まし合うことができる」との関連では1%水準で有意であった。「励まし合うことができる」人は高群が少なかった。

友人と互いに心を開き支え合う、内面的な深い関わり方をしている人、つまり良好な友人関係を形成している人は、子どもに対して肯定的なイメージを強く持つという結果となった。

## 5. 考察

### (1) 子どもや子育てのイメージ形成につながる多様な要因

大学生における子どものイメージについては、子どもとの接触体験が少ないほど子どもの行動特性からくるイメージは否定的になる(野村他、2007)こと、同様に、対児感情の良好な群は、過去に子どもとの接触経験が多く、子どもとの触れあい体験も多いと指摘されるように、先行研究では子どもとの接触経験が子どもイメージに影響を及ぼすとされているものが多く報告されている。

大学生の子どもイメージとしては、接近感情項目などの結果からも、大学生は子どもに対して概ね良いイメージを持っているといえるということがうかがわれた。

一方、子育てイメージに関しては、ポジティブなイメージもネガティブなイメージも幅広くイメージしていることが示された。子どもに対するイメージと子育てに対するイメージそれぞれについて、形成する要因について検討したところ、対児感情の良好な群は過去に子どもとの接触が多く、ふれあい体験も多いとされているので、現在子どもと関わっている頻度も対児感情に影響を及ぼすのではないかと推測さ

れたが、今回の調査では子どもと関わる頻度と子どもイメージや子育てイメージに関連はほとんど見られないということが明らかになった。これより、現在子どもと関わる頻度よりも、どのくらいの時間関わっているか、子どもと関わる具体的な内容によって影響を受けるのではないかと考えた。大学生が現在子どもと関わりを持っているかと子どもに対する接近感情、回避感情とは、ほとんど関連性が見られなかった。大学生は子どもと関わる機会がない人が多く、大学生になる前の段階で子どもに対するイメージはある程度形成されている人が多いということが分かった。また大学生になってから子どもと関わりを持ったとしても、定期的な関わりは少なく、その関わりによっての大きな関連性が見られることはないということが推察された。

子どもイメージの接近感情、子育てイメージのポジティブ感情の両方において、男性よりも女性の方が高い値を示していた。女性は母性本能があるといわれているだけではなく女性にとって子育ては将来自分も経験するという認識があり、子どもと関わる機会や、乳幼児とその保護者との関わりを見るだけでも自分の子どもを持つということとリンクさせて捉えている人もいるのではないかと考えられる。また、女性は男性よりも子どもが好きという人が多く、子どもと関わり子どもが好きになる過程で、子育てに関するポジティブなイメージも育っていったと推察する。子どもイメージの接近感情得点、子育てイメージのポジティブ因子の両方において、子どもが好きという人は得点が高かったことから、子どもへの好意は子どもや子育てイメージを形成することに関連することがうかがわれた。

さらに、子どもの頃の遊び相手、特に身近な家族と遊んだ経験や、近所の異年齢の子どもと遊んだ経験は、対児感情に関連し、楽しかった遊びや、異年齢との間での年上の振る舞いが有意義な体験となり、子どもイメージの形成につながることも示唆された。

## (2) 友人関係は子どもイメージの形成に関連する

友人の有無と子どもへの接近感情得点、回避感情得点の関連を検討したところ、回避感情において有意だった。回避感情得点が高いということは子どもに対して否定的なイメージが強いということである。友人関係の有無が子どもに対して否定的なイメージにも影響を及ぼしているのではないかと推察される。

また友人とどのような関係だと思っているかという質問に対して、「相談し合う」「互いに心を許すことができる」「互いに理解している」「互いに高め合う」「気持ち通じ

合う」「互いに関心をもっている」「励まし合うことができる」の項目において当てはまると思っている人は子どもに対する接近感情得点が高い人が多いという結果になった。友人に対して、心を開いた付き合い方や深い付き合い方をしている傾向がある人は、子どもに対する接近感情が高く、子どものイメージ形成も良好である。子どもにも友人に対しても良好な関係形成できることが伺える。

## (3) 楽しかった保育学習経験によって良好になる子どもや子育てのイメージ

家庭科保育分野の学習や職業体験で子どもと関わる機会の有無と子どもや子育てイメージの関連性について、子どもと関わる機会があったという人の方が、子育てイメージがポジティブであるとの指摘されている。本研究では、保育学習や職業体験で子どもと関わる機会があったという人を対象に、その体験の楽しさについて質問したところ、楽しかったと家庭科で子どもと関わる機会を楽しいと思えることは子どもや子育てイメージに良い影響を与えることが示唆された。保育体験の有無ではなく、有意義で楽しかったということが重要である。

中学校技術・家庭科の学習指導要領には、A(3)ーウ「幼児と触れ合う活動などの直接的な体験を通して、幼児への関心を深め、かわり方を工夫できること」とある。保育分野の授業で実体験として子どもとの関わりをもたせることが、子どもを肯定的に捉えさせるようにする上で有効であるため、教員は生徒に楽しいと思わせるための支援をしていく必要があるといえる。学習指導要領にも、幼稚園や保育所等の幼児との触れ合いが効果的に実践できるように工夫するとともに、事前の打ち合わせを十分行い、幼児及び生徒の安全に配慮することが大切であるとあった。野村ら(2007)の研究では、子どもとの接触体験やきょうだいの数が多いほど肯定的な子どもイメージをもってはいるものの、子どもとの接触体験は子どもの世話には至っていないこと、接触体験の多さは子どもへの関心とは関連がなく、むしろ苦手意識をもたせる結果になっていたことなどを示している。つまり子どもとの浅い接触体験は、それがいくら多くなっても子どもへの関心を高めるどころか、逆効果になる可能性があるというのである。このことは、母親準備性や養護性の育成を考える際に、単に子どもとの接触という「体験」だけを問題にしても有効でないこと、つまり接触体験の「質」を問わなければいけないことを示している(澤田ほか、2013)。よって授業では、幼児と関わる機会を持たせるだけではなく、授業を受ける生徒にとって有意義で楽しい活動となること

が大切であることが推察された。

さらに、子育てイメージを形成するにあたって、世話をされる子どもの姿や世話をする母親の様子を間近で見るだけでなく、実際に子どもたちと関わり、学生たちにとって自分たちの先輩である母親から話を聞くことで子どもや子育て、ひいてはその前に経験する結婚のことを自分に引きつけてより現実的に考える機会となるといえる（澤田ほか、2013）という報告もあることから、子どもや子育てイメージを形成していく上で、子どもと関わるだけでなく、子育て中の母親から実体験を聞いてイメージを膨らませることも重要性が示唆された。

## 6. まとめ

本研究から子どもイメージについて、「保育で子どもと関わる機会の楽しさの有無」「子どもへの好意」「子どもの頃の遊び相手」、が関連していた。保育学習は子どもや子育てに興味を与えられる機会であり、保育体験学習においては単に子どもと関わるだけでなく、その活動を有意義なものにすることで子どもイメージが良好となることが示唆された。また大学生の子どもに対するイメージと友人関係形成には関連があり、友人と相談しあうなど良好な関係を築いている人の多くは子どもに対して肯定的なイメージを抱いており、今後、子育ての対象者の友人関係形成にも着目していくことの重要性がうかがわれた。

## 参考文献、引用文献

- ・細井香 ベビーマッサージ教室の実践とその効果 淑徳短期大学研究紀要,50,p51-67,2011.
- ・串崎幸代 女子大生における親の子育て経験の聞き取りについての一考察 千里金蘭大学紀要、生活科学部・人間社会学部5,p61-67,2008.
- ・今村 美幸、山口 求、光盛 友美、鍋島和貴 親の子育て体験談を聞くことによる看護学生の子育て観への効果 日本小児看護学会誌20(1),p107-112,2011.
- ・石松直子、江藤節代、山本捷 大学生の持つ育児イメージと対児感情—看護学科学生と他学科学生との比較— 日本赤十字九州国際看護大学intramural research report2,p145-154,2004.
- ・土居久子、大槻優子 母性看護実習と母性意識の変容 —花沢の対児感情評定尺度・母性理念質問紙を用いた実習前後の対児感情・母性意識の測定から— 順天堂医療短期大学紀要4,p50-58,1993.
- ・母親の子ども・育児感情 —虐待の温床としての育児不安の要因—
- ・佐々木綾子、町浦美智子、中井昭夫、波崎由美子、田邊美智子、末原紀美代、松木健一 青年期の親性を育てる「乳幼児とのふれあい育児体験」の男女差に関する研究—心理・生理・内分泌学的指導による検討—福井大学医学部研究雑誌8(1/2),17-29,2007.
- ・野口純子、小川佳代、松村恵子 乳幼児を育てている母親の悩みと育児ストレス —保育所児と幼稚園児の比較— 香川県立保健医療大学紀要2,p79-86,2005.
- ・吉岡和子 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感 青年心理学研究(13),p13-30, 2002.
- ・渡辺弥生、石井睦子 母親の育児不安に影響を及ぼす要因について 法政大学文学部紀要51,p35-46,2005.
- ・滝山桂子 保育学習に関する中学生・高校生・大学生の意識と課題：生活者の視点を導入して 日本家庭科教育学会誌42(3),47-54,1999.
- ・中谷隆（編） 若者の子育てと家庭づくりに対する意識の調査結果報告書—持続可能な次世代の親育ての取組に向けた提言—平成22 年度広島県「若者の子育てと家庭づくりに対する意識の調査研究」補助事業調査研究報告書 2011.
- ・野村幸子・河上智香・長谷典子・藤原千恵子 子どもとの接触体験からみた看護学生の子どもイメージ 人間と科学：県立広島大学保健福祉学部誌， 7 (1)， 169.180. 2007.
- ・佐々木綾子・末原紀美代・町浦美智子 青年期男女の親性を育てる乳幼児との継続接触体験の内容分析による評価（第1報）思春期学， 27(3)， 270.282. 2009.
- ・礪波朋子 女子大学生の乳幼児との接触経験と育児イメージ及び養護性との関連 京都光華女子大学研究紀要49,13-25
- ・佐藤洋美 乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響 生活体験学習研究， 4， 35.54. 2004.
- ・野村幸子・河上智香・長谷典子・藤原千恵子 子どもとの接触体験からみた看護学生の子どもイメージ 県立広島大学保健福祉学部誌7(1),169-180,2007.
- ・武田奈美・中山淳子・吉田恵理・上條育代・稲吉久美子 女子短大生における乳幼児接触体験による母子準備性への影響 飯田女子短期大学看護学科年報 5， 205.221,2002.
- ・大井裕紀子・中山哲哉・栗田喜勝 保育専攻大学生にお

ける育児性の形成促進.保育実習とその後の学習経験による効果.吉備国際大学社会福祉学部研究紀要(13),145-153,2008.

- ・阿部 範子 育児不安を持つ母親が求める子育て支援サービス 日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学紀要(14),23-27,2009.